

授業公開について

特別支援教育専修 成田 奈緒子

1. 公開した授業

- * 科目名：「障害児教育学演習」（特別支援教育専修／4年）
「障害児教育学演習」（特別支援教育専修／3年）、
「研究指導」大学院／M2）の合併授業
- * 日 時：2009年11月9日（月曜日）2限
- * 教 室：8401教室

2. 科目全体のねらい

将来、特別支援学校／小学校の教員になる可能性のある学生たちが、これまで学習してきた専門科目から興味を持った課題を自ら設定し、それに関する新しい知見を得るための方法論を模索し、実現していくことが本授業の目的である。最終的には、卒業論文、修士論文を作成するわけであるが、当該専修では、卒論提出直後にその内容を全く基礎知識のない他の学生や教員に対して発表する卒論発表会が行われるため、早い時期からその準備として自分が得た結果の一部分を毎回パワーポイントを用いて5~10分程度の内容にまとめて発表原稿を作成し、他の学生に対して発表する手法を用いて練習している。その発表のあとに質疑応答を行い、発表者自身も気づかなかった発表内容の不備、説明の不足などを気付かせることがねらいである。

3. 公開された授業のねらい

本授業では、5名の学生に順番に発表を行わせることとした。最初の大学院生は、すでにこれまで2年間研究を続けており、今回は秋以降に小学校で行った実践の成果をまとめさせて自分なりの理解を深めることを目的とした。また、4年生2名と3年生1名は本研究室が3年前より着手して継続的に行っている自閉症スペクトラム障害児者における脳機能の多角的検索に、それぞれが違った観点から関わり実験を行っている。この3名の成果を連続的に発表することにより、聴衆の学生にも、また発表者自身にも、このプロジェクトの総合的な視点からの考察ができることをねらっている。また、最後に発表した4年生は、自分の研究テーマに関連した小学生に対する生活リズム改善プロジェクトの一環として成田が請けた、某小学校における公演（早寝早起きに関するクイズ大会とリズム遊び実践）の予行演習を行った。この公演にはゼミのメンバー10名が参加することになっており、全ゼミ生が集まるこの機会を使って総合的な練習を行うことがねらいである。

それぞれの発表に対し活発に質疑応答を行わせ、特にこれから研究活動を開始する3年生にも基礎的な知識を獲得させることもねらいの一つである。

4. 特に見てほしかったところ

学生たちは、もうすでに何回かこの形式での授業を行ってきているので、準備、進行に

については熟知しており、スムーズに時間調整を行いながらほぼ自主的に授業を進めることができている。また、討議も学年を超え活発に行われ、それぞれが自分のこととしてそれぞれの研究プロジェクトを考えることができつつあることが、見てとれるであろう。現代の学生たちはどうしても個人主義的傾向が強く、自分の卒論さえ出来上がれば良いとばかりに、他のゼミ生のプロジェクトには関心も持たず、コミュニケーションも図らない姿が多く見受けられるので、これを廃して「ゼミはチームである」という自覚をつけさせることそのものが本授業のもっとも大きな目標である。

5. 授業について自評

前項にも書いたが、昨今の学生を見ていて一番憂えるのは、教員を目指しているにも関わらず、他人に対する関心が薄く想像力に欠ける学生が急増していることである。基本的な礼節もわきまえない学生が多いが、これは家庭でのしつけだけに帰結する問題ではない。学生自身が他人に対して愛情を持たず、人を大切にしない気持ちを持たない。それは、発達心理学的に述べればとりもなおさず、自分自身を愛さず、大切にしていないということになるのである。この自尊感情、自己肯定感の低下は今、小中学生のころに関する大きな問題の一つとして全国養護教諭研究会などで取り上げられているが、教員を目指す学生たちにすでにこれが育っていないなら、彼らが教育する子どもたちに改善は望めないし、それどころか、現実的に教員のうつ病罹患率の上昇や学級崩壊、モンスターペアレンツなどに象徴される教育の崩壊現象は枚挙にいとまがない。

これら教育に関するたくさんの問題の原因はもちろん複合的ではあるが、その中に教員そのものの質の問題も多く存在すると私は思う。現代日本は言うまでもなく情報化社会であり、教員も親も学生も常に知識とマニュアルといった膨大な量の情報に翻弄されている。今、学生として学んでいる若者たちは、学校ではゆとり教育の名のもとに基礎学力を固着させずに来た者が多い。学習は好奇心から始まるものであるので、人に対する好奇心を多く持つ者は、学校教育がどう変わろうと必ず自発的に学習を行うはずであるが、残念ながら前述したように、他人にも自分にも愛情を持たない者たちには、当然ながら学習を自ら行うことは観察されない。実際、人に教育を行うことを将来の目標としているにもかかわらず、「勉強は大っ嫌いです」と公言する教育学部の学生を何人も見た。本来なら家庭で乳幼児期から基礎を作り、小学校から始まる教育現場でしっかり作り上げられるべき「人が大好き」というところが満足に作られていないということであろう。

残念ながらうまくところが育たなかった成人に、再度このころを養うことは大変難しいことではあるが、不可能ではない。「認知行動療法」という心理学のアプローチ方法があるが、これは簡単に言えば「行動を変えることでころ（認知）を変える」という治療方法である。うつ病や摂食障害などで良く使われているが、これを応用すれば「人を愛するとみせかける行動」を行い、繰り返すことでころを徐々に変えることができるのである。ゼミの活動を通して私が真に目標にしていることはこのことである。具体的には、教員の指示を聞く、言われたことをすぐに実行する、目上の者を敬うという態度を保持する、教員やゼミ生同士の連絡・報告・相談を密に行う、他のゼミ生の研究内容についても全霊を傾け理解することに務めて、気づいたことは率直に述べる。こんな当たり前のことの繰り返しこそが、「人を愛し、他人のころを想像する」ことができるようになるため、す

なわち教員の適性を育てるための大事なカギとなると信じている。残念ながら思い通りに成果が挙がらないこともままあるわけだが、文教大学の建学の精神「人間愛」を学生たちに教え込むことこそが私たち教員の使命であると痛感する今日この頃である。

6. 授業公開についての感想・意見

今回の試みは高く評価するべきものだと思う。本学には教育熱心な素晴らしい先生方も多くいらっしゃることを知ってはいるが、私自身、他の先生方の授業を拝見できる機会がとて少ないのを残念に思う。今後、授業公開を全学的な慣例として定着させることは、私たち教員の意識を高める上でも、また学生たちにとっても有益なことであると考えている。

平成 21 年度 授業公開 授業計画書

2009 年 11 月 9 日(月)2 限

学部	教育	授業者	成田奈緒子		
授業科目名	単位数	講・演・実	年次	公開教室	
障害児教育学演習	必・選 ()	演習	3年 4年 大学院生	8401	
<p>本時の目標</p> <p>それぞれの学生が自分の研究テーマに沿った研究の進行状況を他の学生に紹介し、疑問点や指摘を受けてさらにより良いものにしていくための演習である。</p>					
<p>本時の内容</p> <p>PC、プロジェクターを使い、学会形式で、与えられた時間内に研究の内容を発表し、それぞれ質疑応答の時間を取りながら進行していく。</p>					
<p>本時の展開</p> <ol style="list-style-type: none"> 熊倉悠佳 (M2) 発表15分 質疑応答5分 「役割演技の脳科学・生理学的評価とその有用性の検討」 五月女颯之 (4年) 発表7分 質疑応答3分 「自閉症スペクトラム者におけるスイッチングタスクに呼応した前頭葉脳血流変化の欠如」 立道結香 (4年) 発表5分 質疑応答3分 「多チャンネル光トポグラフィーを用いた高機能自閉症患者におけるタスクに呼応した脳活性化部位の検討」 樋口大樹 (3年) 発表5分 質疑応答3分 「高機能自閉症患者における図形認知と顔認知における脳機能変化の検討」 猪田将史 (4年)、他数名 発表20分 質疑応答5分 「早寝早起き朝ごはんキャラバン隊」実践予行演習 (12月4日につくば市内の小中学校で児童対象で行う予定の早寝早起き朝ごはん啓蒙活動の実践内容の練習) 					
<p>本時の評価の視点(参観の視点)</p> <p>どなたでもご自由にご参加ください。</p> <p>まだまだ未完成の研究ばかりですが、発表を聞いていただき、忌憚なきご意見をいただくと学生たちにとっても大変良い勉強になります。</p> <p>よろしくお願いいたします。</p>					